

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷四十五第

月二年七十和昭

論叢

日本經濟學の源流……………

經濟學博士 本庄榮治郎

資本主義的論理……………

經濟學博士 柴田敬

江戸時代の經濟問題……………

經濟學士 堀江保藏

海運政策の積極性……………

經濟學士 佐波宣平

景氣循環過程に於ける消費財產業の意義……………

經濟學士 青山秀夫

研究

サマル『人口論』の形而上學的基礎……………

經濟學士 白杉庄一郎

事變下の中小工業と金融……………

經濟學士 田杉競

トーマス・マンの重商主義思想……………

經濟學士 堀江英一

說苑

宋代の農田に就いて……………

經濟學士 穗積文雄

附錄

彙報・外國雜誌論題

經濟論叢

第五十四卷 第二號

(通稱第百零拾號)

昭和十七年二月發行

論叢

日本經濟學の源流

本庄榮治郎

一序論

(一)我國は上古以來幾多の外來思想が移入された。それは、結局に於ては我國の自然狀態・國民性・生活狀態・政治社會狀態等によつて著しき變化を受け、遂には日本的なものとして存在するに至るものである。例へば儒教について之を見るに、その民主主義的色彩・易姓革命の思想等の採る可らざるものは之を捨て、採るべきは採つて之を同化した。又佛教について之を見るも神道との融合から本地垂迹説が起つた如き、或は又印度を滅亡に導いた佛教が、我國に於ては少くとも國家の繁榮を妨ぐることなく、寧ろ國家主義の立場を採つた如きこれである。要するに外來文明に對して排他的ではなく包容的であるが、然し模倣追隨的ではなく、同化創造的であることは外來思想を克服して我が國情に適する如く改造し、日本獨特の思想を發展せしめた所以に外ならぬ。たとひ儒教

や佛教が日本で創造されなかつたにせよ、日本の心を以て特色づけられ、それに新しき生命をふき込み、新しき形を具へて、日本の儒教、日本の佛教として嚴に存在するに至つたのである。従つてそれを日本のものとして考へることは當然のことといはなければならぬ。思想についてもこのことは同様である。

(二)然し當初に於ては、外來思想はすべての點に於て日本人自らの内に存する固有の日本思想と相容れるものとは限らないがため、その思想が相當の勢力を得るに至れば、固有の日本思想との對立が意識せられ激成せられて、日本主義思想の鼓吹となり、遂にはそれ等の思想を、日本精神の熔爐の中に投して、漸次それを陶冶し鍛鍊して、遂に特殊のものとして、即ち日本獨特の型と心とを具へしめて再現せしむるものであつて、これ即ち外來思想の克服である。即ちそれは、わが國體觀念により、或は民族性により、或は我國の諸事情によつて檢討され鍛鍊されて、日本主義的な思想として確立するものである。従つて日本主義思想の盛んに唱道されたときには、必ず他方に之に對立する外來思想が相當の勢力を有せしときであり、かゝる事情を數回繰り返して今日の日本學若くは日本經濟學の確立が問題とされてゐる時機に到達したものであると思ふ。

(三)日本經濟學建設の問題は我國現下の切實なる問題であり、その可能と方法とが頻りに論議されてゐるが、所謂日本經濟學といふ言葉の解釋に關しては大體二種の別あるが如くである。¹⁾一は『日本に於ける經濟學』であつて、日本といふ國土に於て日本人によつて研究されて來た經濟學、二は日本獨特の生活に立脚し、日本の國家意識によつて打ち立てられる經濟學、換言すれば我國の風土、建國以來の歴史に基いて主張せられる『日本主義の經濟學』である。私はこの第二の意味の日本經濟學の問題が、現下重要な問題として取り上げられてゐるものと考へてゐる。尤この意味の日本經濟學が眞に確立し大成するがためには、今後尙多くの研究に俟たざる可ら

1) 日本諸學振興委員會研究報告、第五篇及第九篇參照。

ざることと考へられるが、從來の、この方面の研究は、大體に於ては理論的抽象的な論究が多かつたやうに思ふ。私は茲に日本經濟思想史の方面から見てその生成發展の跡を検討したいと思ふ。思ふに我國の自然的・人間的・社會的なる特殊の事情に立脚し、國情に即した獨特の經濟論を立て、日本主義を高調した學者は今迄に必ずしも少くはない。かゝる見地に立つて日本經濟學の先蹤を求むるならば、既に江戸時代にもその人を求むることが出来る。

二 江戸時代における日本の經濟思想概観

(一) 江戸時代には一方に學問が進歩し、他方に經濟生活が充實發展した。茲に於て前時代に見ることを得ざりし經世實用の學が興り、經濟學説が多く世に出づるに至つたのであるが、當時の思想界に大なる影響を與へたものは儒學思想であつた。殊に朱子學は幕府の官學思想として大なる勢力を持つてゐた。尤その外にも種々なる學派があるが、何れも支那思想に立脚したものである。これがため或は當時の學者を以て『悉く支那思想の奴隸』であり、『その經濟説は徹頭徹尾支那學説の燒直しにして、殆んど一點の創見に出たるものなしと言ふも亦過言にあらざるなり』と極言されてゐる學者もある¹⁾。勿論支那を中國と仰いて自ら東夷を以て卑下した荻生徂徠一派の不見識な考へ方もあつたが、大抵の儒者は何等かの程度に於て支那思想を日本の事情に適するが如くに改造し同化して、日本の儒教として、その説を述べたものであるから、日本的な色彩を持つる點も少からず、論者の如くその説を以て悉く『支那學説の奴隸』とし『その糟粕を甜るに過ぎざる』ものとするは、極端に失するものといはなければならぬが、然しかゝる言葉が用ゐらるゝ程、支那學説の影響は大であつたのである。

1) 瀧本誠一、日本經濟學説の要領、31頁以下。

(二)然し他方より見れば、當時の經濟なる言葉は『經國濟民』の義であり、その説く所は全く實際の政治を評論した政策論に屬するものが多かつた。即ち經濟の原理原則を考へるといふよりは、その時その處の政策を論じたもので、一般抽象的なる議論よりも寧ろ實際的な議論が多かつたのである。中江藤樹が「時と所と位と三才相應の至善をよく分別して、萬古不易の中庸をおこなふを眼とす」といひ、その弟子である熊澤蕃山も亦屢々時・處・位といふ言葉を擧げて問題を論じてをり、太宰春臺が「凡經濟を論する者知るべきこと四つあり。一つには時を知るべし。二つには理を知るべし。三つには勢を知るべし。四つには人情を知るべし」といへることも、經濟が抽象的原理原則を説くよりも、寧ろその國その時の事情を十分に検討すべきことを説けるもので、當時の經濟思想が現實的なものであつたことを認むべく、必ずしも支那思想に膠着し、我國の事情を顧慮せず、その議論をそのまま我國に適用せんとする者のみであつたとは斷し得ないであらう。

江戸時代中期以後、歴史的研究が盛んとなり、日本古代の研究が行はるゝにつれて、儒教の如き外國的觀念によらず、日本固有の思想に基き、我國の特殊性・優秀性を自覺して日本精神を高調し『日本に歸れ』との強き主張がなさるゝに至つた。かゝる思想家は勿論江戸時代の初期にも存する。例へば山鹿素行の如きはそれであるが、儒學派に對する學派としては國學を擧ぐべきであり、蘭學者の中にも亦支那思想の排撃と日本事情の認識とを重視せるものがあり、其他我國特殊の事情に立脚してその論を立てた學者は必ずしも少くはないのである。以下これ等の學者につきその思想の一斑を検討しやう。

三 江戸時代に於ける日本の經濟思想各説

2) 翁問答、日本倫理叢編、第一卷54頁。

3) 經濟錄、日本經濟叢書卷六、14頁。

(一) 山鹿素行 既に述べたる如く江戸時代の初期に於ける山鹿素行の思想は日本思想として注意すべきものであるが、それはその著「中朝事實」に於いて之を見ることが出来る。同書は素行四十八歳のとき(寛文九年)、赤穂藩居申の作であるが、その序文によれば彼は從來の支那崇拜の非を悟り、皇國日本を見直し、日本の日本たる所以を明かにしたものであつて、日本を以て中國と呼び、世界最高の君子國として、國體の尊嚴なることを説き、萬丈の氣を吐いたものである。曰く、

『皇祖高産靈章、遂に皇孫天津彦彦火瓊杵尊を立て、以て葦原中國の主と爲んと欲す。謹みて按ずるに、是れ本朝を以て中國と爲るの謂なり。これより先き、天照大神天上に在して曰はく、葦原中國に保食神ありと聞くと。然らば則ち中國の稱は往古より既にこれあるなり。(中略)天地の運るところ、四時の交るところ、その中を得れば、風雨寒暑の會偏ならず。故に水土沃にして人物精し。是れ乃ち中國と稱すべし。萬邦の衆き、唯り本朝及び外朝、その中を得て、本朝の神代、既に天御中主尊あり、二神は國の中の柱を建つ。則ち本朝の中國たるや、天地自然の勢なり。神神相生み、聖皇連綿し、文武事物の精秀、實に以て相應ず。是れ豈誣ひてこれを稱せんや』¹⁾

『夫れ中國の水土は萬邦に卓爾して人物は八紘に精秀たり。故に神明の洋洋たる、聖治の蘇蘇たる、煥乎たる文物、赫乎たる武徳、以て天璣に比すべきなり』²⁾

と。全篇實にこの趣旨を以て貫いてゐる。もとより本書は經濟を論したものでなく、『皇統・實事を編し、兒童をして焉を誦し、其の本を忘れざらしむる』ためのものであるが、直接間接に我國民の經濟生活に關する事項が説かれてをり、而もそれについても日本精神による解釋が示されてゐるのである。例へば國民生活の基礎は國土生成のとき神明の授け賜ふた處であるとし、また「天照大神天狹田・長田を以て御田と爲したまふ。又方に神衣を織りつつ、齋服殿に居す。」³⁾ 列聖相承けて農業を帥む、蠶織に力めしめ給ふは、即ち「皆農事を以て朝政を行ふ」としてゐるが、之はとりも直さず、産業興隆を以て政治の要諦とし給ふ大御心を識せるものといふべきであらう。

1) 山鹿素行全集、第十三卷、頁18。
 2) 山鹿素行全集、第十三卷、頁7。
 3) 山鹿素行全集、第十三卷、頁78。
 中朝事實自序。

らう。

その著「山鹿語類」その他に於ては經濟に關する論策が豊富に述べられてゐることは、今更いふ迄もないことであり、素行の思想の中に日本的經濟思想の存することは炳乎として明かである。

(二)國學 元來國學といふ言葉は外國學に對するものであり、外國の學問よりも自國の學問の優秀性を意識した名稱とも考へられるが、それは日本學を建設すべき重要な素材であつた。それによつて日本の心、日本の傳統、日本文化の本質が明かにされたものといふことが出来る。

國學の勃興は家康の學問獎勵、その後の神道思想の鼓吹、儒教の流行と支那思想崇拜に對する反擊等によつて行はれた所であり、國學の先覺者として下河邊長流・荷田東隱等が擧げられ、國學の代表者として賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤の存することは今更いふ迄もないことである。眞淵は「國意考」を著して古道を説き、古代日本に歸れとの叫びを揚げたが、宣長の「直隗靈」・「玉勝間」は更にその思想を發展せしめたものである。政治經濟の道を説くことは必ずしも宣長の學問の本筋ではないが、然し「秘本玉くしげ」に現はれた治道論の思想は、當時の經濟說として重要な意義を有するものである。從て宣長を以て當時の經濟學者の一人として考ふることは決して不當ではない。

宣長の思想は復古的であり保守的であるが、空理を説かず、實證主義的である。而も國學上の見地より儒者の支那思想に拘泥するを難じ、全く「漢意」^{わんい}を交へず、純然たる日本固有の大道に本づいて政策を立つ可きものとし、その見地に立つて論議してゐる。例へば「皇國の古は道なしといふは此方にまことに勝れたる道のあることをしらずして、たゞ唐戎の道をのみ道と心得たるひがことなり」とし「まことの道は、天地の間にわたりて、何れの

4) 詳しくは東晋太郎、中朝事實に於ける皇道經濟の精神、商學論究、第二〇號參照。

國までも同じくたゞ一すぢなり。然るに此道ひとり皇國にのみ正しく傳はりて外國にはみな上古より既にその傳來を失へり。それ故に異國には又別にさまざまの道を説て、おのゝ其道を正道のやうに申せども、異國の道は皆末々の枝道にして本のまことの正道にあらず。』然らば正道とは何か。それは『天照大神宮の受けたまひ、たちもたまひ、傳へ賜ふ道』である。かの天壤無窮の神勅こそ『道の根元大本なり』とし、皇室を尊ぶべき所以を力説し、わが國の古代精神に歸らんことを高調した。されば『經書の趣ばかりにては、時世のもやう、國所の風儀、古今の變化などにうとき故に今日の政務にはまことに于遠にして、却て世俗の料簡にもおとる事もあるものなり』と説き、『今の世の人はたゞ今の世の上の御掟をよくつゝしみ守りて、己が私のかしこだての異なる行ひをなさず、今の世におこなふべきほどの事を行ふより外あるべからず。これぞすなはち神代よりのまことの道のおもむきなりける』と斷じてゐる。

また個人經濟と國民經濟若くは一藩の經濟と國家全體の經濟との間には區別あることを明かにし、一國の政策としては個人の利益よりも國民全體の經濟に影響する所を考へなければならぬと説き、また一國の制度として存する場合には、各地各個人に於て之れより脱する能はざることを説いた點も注意すべきことであらう。

要するに、宣長は古典の研究によつて自然的且現實的である我國民性の本質を明かにし、日本的な感覺感情が『漢意』によつて歪められてゐることを指摘し、その本然の性質に立歸り、皇國の大道に基いて政道を正すべきことを説いた。かくて國學は社會思想として重要な意義を有するに至つたのである。

宣長の思想を更に一層發展せしめたのみならず、積極的に國學運動を以て社會改革の導火線たらしめた者は平田篤胤である。篤胤は日本尊重・日本中心の信念に據つて儒佛二教を排斥し、殊に儒學者の弊を痛烈に攻撃した。

その著「伊吹於呂志」はそれである。篤胤はまた日本の優越なる國風・國柄を説いただけでは満足せず、日本の儒者が支那印度を先進國と仰ぐことに多大の不滿を感じ、寧ろ宗教も文化も日本を以てその根源とし、支那印度西洋も日本の流を受けたものとしてゐる。宣長がまことの道は日本にのみ傳はつてゐると説いたに比すれば、篤胤の説は高飛車的に儒者を抑へるための説となつた感がある。それは兎も角として太宰春臺などが『日本には元來道といふこと無之候』などと説いたことが、國學者の駁撃的となつたものであり、之より後日本中心の思想は一層の發展を遂げたものといふことが出来る。

要するに眞淵・宣長・篤胤による國學の勃興は日本独自の姿を把握しつゝ、國體思想を培ひしもので、それは即ち日本學の建設であり、而もそれは實踐的に勤皇運動と密接なる關係を持つこととなつたのであるが、他面に於ては、それは宣長の場合における如く、經濟思想と關聯する所深く、國學は所謂日本經濟學の一流流をなすものを見ることが出来る。

(三)蘭學 次に考ふべきものは蘭學である。江戸時代の中期以後西洋事情の研究が行はれ、吉宗のとき蘭書閱讀の禁を解き、それより後蘭學は次第に發達した。最初は語學としての蘭學であるが、後には蘭語を通じて化學・醫學・曆學・天文學・兵學其他の諸科學が我國に傳へられた。寛政頃に及んで蘭學者としての經濟思想に特に注意すべきものが現はれるに至つたが、その主なるものは本多利明と佐藤信淵とである。

本多利明の思想は西域物語や經世秘策によつて之を知ることが出来る。彼は西洋思想の影響を受けた所が多いと考へられるが『日本は支那より見れば大に譽れにして神武以來皇孫を失ず、他國の爲に侵されず、斯程目出度日本の風俗なるを、兎角に支那の風俗を龜鑑とするは淺はかなる次第なり』とて我國體の尊きことを説き、『文字

は事を記し情を述るを旨とせば、數萬ある支那の字を記憶せんより、我日本の假名を用て事を記さば大に便利ならん。……支那の國字に達し博學の名を得んよりは、やはり我日本の假名文字を用て其情味を盡さんは便利ともいふべし』とて漢字排斥、假名文字採用論をなしてゐるが、その經濟思想は、當時一般の學者が支那學說の影響を受けそれを祖述せしものとは大に異り『日本は海國なれば渡海運送交易は固より國君の天職最第一の國務なれば、萬國へ船舶を遣りて國用の要用たる産物及金銀銅を抜き取て日本へ入れ、國力を厚くすべきは海國具足の仕方なり。自國の力を以て治る計りにては國力次第に弱り、其弱り皆農民に當り、農民連年耗減するは自然の勢なり』といひ、自給自足の頼むに足らざることを説き、外國貿易が兩當事國を利する所以を明かにし、且彼の間常に對等の關係を以て貿易をなすべきことを道破し、必要品を輸入し精良品を作りて輸出すべきことを説いてゐる。更に利明は屬島開發の必要を論じ、殊に蝦夷諸島の開發を以て最急務なりとし『萬事萬端其土地の風儀を基として日本の風儀を漸々と布くべし』『其島の自然土産を取て日本へ運送し交易して是を償ふを手始とする也』といひ、更にカムサスカ・唐太・山丹・滿洲・北アメリカに我國の領土を擴張すべきことを説いて居る。鎖國の當時に於て開國進取の立場に據つて我國情を吟味し、富國發展の途を明かにした利明の識見は特筆すべきものがあると信ずる。要するに利明は日本本來の姿を正視し、當時内外の狀勢に刺戟されて、皇國發展の新理法を道破した偉大なる經濟學者といふことが出来る。⁶⁾

次には佐藤信淵であるが、その思想は利明の思想を更に一層發展せしめたものと見ることが出来る。彼は儒學國學のみならず蘭學者の說をも取り入れて自家のものとし、更に全國を歴遊して我國の事情に通じ、國家社會主義的な意見を立てた。その體系は創業・開物・富國・垂統の四門とすることが出来る。創業は國家に君臨する治者

6) 拙著、本多利明集解題、參照。

の道徳を説き、開物は産業政策及生産技術を講究せるものであり、富國はまた融通ともいひ、運輸交通及商業即ち財の交換に關する理論と政策とを論じたもので、垂統は理想國家の組織制度を述べたものである。而して「混同秘策」には「萬國は皇國を以て根本とし、皇國は信に萬國の根本なり。』『皇國より世界萬國を混同することは難事に非るなり』として更に之を詳論してゐる。信淵の説は或は架空の論の如く考ふるものもあるが、「天柱記」の著によつても明かなる如く、我が神典を重んじて國體を忘れず、日本の優秀性を説き、日本中心の思想の下に國家社會主義的な見地を立てたことは注目すべき所であらう。

(四) 心學 心學なる言葉は陽明學派や朱子學派の異名の如くにも用ゐられるが、茲に所謂心學は享保十四年石田梅巖に依て唱道されたもので、所謂石門心學を指す。心學の思想は神儒佛三教の何れにも偏せず之を止揚して獨特なる日本的立場を示したものであり、而もそれは自己の體驗から生れ、體驗を重んじた學行一如のものであつた。梅巖は我が國體の崇高なる所以を論じて曰く、

『我朝の神明も、伊弉諾尊・伊弉册尊より受玉ひ、日月星辰より萬物に至るまで總主り玉ひ、殘所なきゆへに唯一にして神國とは云へり。こゝは工夫有べき所なり。然れども唐土に替り、我朝には大神宮の御末を繼せ玉ひ御位に立せ玉ふ。依て天照皇大神宮を宗廟とあがめ奉り、一天の君の御先祖にてわたらせ玉へば、下萬民に至るまで參宮と云て、盡く參詣するなり。唐土には此の例なし。此の國には宗廟と尊ぶゆへに神樂初穂を捧奉る。今日天下の萬民より君へ貢物を捧ぐるが如し。』

かくて四民は各々その所を得て神國日本の發展を期することが出来る。即ち『士農工商は天下の治る相となる。四民かけては助け無かるべし。四民を治め玉ふは君の職也。君を相くるは四民の職分也』と論じ、士は位ある臣、農は草莽の臣、商工は市井の臣なりとし『臣として君を相くるは臣の道也。商人の賣買するは天下の相け也』と喝破してゐる。それは當時の農本商末乃至は町人抑壓論を打破して、町人の營利行動を正義化し合理化して商人道

7) 佐藤信淵家學全集、上卷所收。
8) 都鄙問答、日本經濟叢書、卷八、308頁。
9) 都鄙問答、前掲書、330頁。

を説いたものであるが、決して私心私慾を認めたものではない。町人は市井の臣である。天下の財寶を通用して萬民の心を安んずるものである。従て町人道の第一は「正直の徳」である。「我なしの本心」に立ち、各自その分を守る思想も強く主張されてゐる。されば町人道の確立は即ち町人道の自覺に俟たねばならぬ。かくて「知足安分」の悟境に入ることが出来、四民各々その所を得てその本分を盡すことが出来るのである。梅巖の思想は、かくの如く國體を重んじて萬民輔翼の道を説いたものであるが、彼の後、この思想は全國に普及し、心學講舎の設けらるるもの三百に近く、從來の學問が文字を通じて目に訴へたのに對して、講席を設けて教義を耳に傳へ、江戸時代の社會教化機關として大なる役割を果した。然しそれと共に心學思想の内容が儒教倫理の通俗化に墮した點も少くはなかつた。然し何れにするも心學の思想には所謂日本的なる思想を含蓄せること少からざるを認めざるを得ない。¹⁰⁾

(五) 報徳思想 報徳の名稱は論語より出て徳を以て徳に報ゆるの意であり、徳は徳行の意で、報ゆべき徳は天地君國父母の恩徳を云ふ。¹¹⁾而して「我が道は至誠と實行のみ」¹²⁾とある如く、それは單なる思想としてではなく實踐としてであつた。

二尊徳は所謂學者ではなく、獨學自得の人であり、又實踐躬行の人であつた。その思想は神儒神三教の影響を受けてゐるが、その思想の根本は天照大神の開闢の大道によつて興國安民の實を擧ぐるにあつた。即ち

『天照大神蒼生の斯の如く淺ましき困苦を深く歎かせ玉ひ、推讓の道を以て豊葦原を開き安國と平げ玉ふ。其初僅かに數頃の田を開き秋實を來歲に譲りて閉糶し、年々歳々推讓り開せ玉ひ芒々たる原野漸く開田となり、津々浦々に至るまで限なき米粟器材を生じ、終に豊饒安樂の土地となし玉ふもの推讓の致す所なり』¹³⁾

と。かくの如く茫茫たる原野が豊葦原の瑞穂國として實現するに至つたのが、即ち神國の大道であり、この神意

10) 竹中喩一、石門心學に於ける經濟思想、經濟論叢第五十三卷四號。

同、石田梅岩の生涯と學問、經濟史研究第二十五卷四號。

11) 福住正兄、報徳學内記(二宮尊徳全集、第三十六卷861頁)。

12) 二宮翁夜話 139(二宮尊徳全集、第三十六卷67頁)。

を承けて、大は國土を經營し、小は農民一家の安泰を計るべきものと考へたのであつた。

右の引用句に於て勤勞と推讓とが説かれてゐるが、報徳仕法は通常、之を至誠・勤勞・分度・推讓の四大綱目としてゐる。分度とは一國の財政又は一家の經濟を自然の分に適應せしめ、その度を超えざらしむることであつて、具體的には一國若くは一家の過去數年の歳入出を平均してその國又はその家の天分の度合に適應せる歲計を確定し一定年間は之を更改せず、餘財の生ずるを期するものである。この餘財を讓つて復興の策を立つることが推讓である。之を詳説すれば分度は更に分内と分外とに分つ。前者は年々の生活費で、後者は子孫及公共のために備へ置くものであるが、分内は更に經常費と臨時費とに區分する。分外にも二種あつて、自己及子孫のための後年の備に供するものは自讓であり、親戚朋友より郷里國家等へ讓る公共的慈善的性質のものは他讓である。この自讓と他讓とが即ち推讓である。尤環境によつて此等各區分の何れを主眼とするかは自ら異なる。以上の分度・推讓は報徳思想の根幹をなすもので、それに到る手段が至誠・勤勞である。茲に道徳と經濟との合致が見出される。要するに尊徳の思想は自己の經驗と世の實情とに即して立てられた獨特のものであり、神國の大道がその根本である。その半言隻句といへどもその體驗より出てゐる。翁に於ては思想即ち實踐であつた。その思想の根柢をなすものは道徳であり、道徳と經濟とが融合して翁の思想が形成されたものである。従つて尊徳の説く所は一種の教訓であり、至誠の結晶であつた。尊徳は蓋し異色ある日本的經濟思想家といふべきであらう。

(六) 水戸學　水戸學はいふ迄もなく水戸彰考館を中心として發達した一種獨特の精神を講明せんとするものである。その精神の基礎となつたものは光圀であり、大日本史の編纂はその現はれの一つである。尤水戸學にも自ら隆替があるが、その最も盛んであつたのは光圀時代と齊昭時代とであつた。

水戸學に屬する學者は多い。幕末に於ては齊昭を中心としてその周圍に多くの人物が集まり、全國の志士が之と交つた。幕末勤皇志士の精神を培つたものは實に水戸學における國體觀念であつた。齊昭の「告志篇」には

「日本は神聖の國にして、天祖天孫、統をたれ、極を建て給ひしより以來、明德の遠き、太陽と共に照臨ましまし、實祚の盛なる天壤と共に窮りなく、君臣父子の常道より衣食住の日用に至るまで、皆これ天祖の恩賚にして、萬民永く飢寒の患を免れ、天下敢て非望の念を萌さず、有り難しと申すも恐れ多き御事なり」¹⁴⁾

と述べてゐる。幕末開鎖の論置きとき齊昭は夙に大砲を鑄造し大船を造り國防を嚴にして攘夷論を唱へた。然しその眞意は攘夷を斷行して神州の威武を示した後に、自發的に開國通交すべきものであるとの考であつたことはその著「海防愚存」によつて明かである。而して右の「告志篇」にも「建策」にも當時の社會經濟狀態と之に對する齊昭の種々の意見が述べられてをり、それは經濟思想の上に於て注目すべきものである。

幕末水戸學の雄、會澤安には「新論」の著がある。本書は我國の國體論が之によつて一先づ完成したとまで稱せられるもので、わが國體の尊嚴を説き、世界における我國の使命を道破したものである。即ち攘夷を斷行して、外は夷狄の野心を粉碎し、内は國民の自覺を促し、舉國一致の精神を醸成し與論を統一して國難に當るべきを説き、富國強兵に關する方策を論じ、更に士農商貨幣物價等についても論を進めてゐる。この新論は文政八年彼が四十四歳のときの著であるが、文久二年八十一歳のとき將軍慶喜に上れる時務策には開國論を述べてゐる。然しそれは四圍の情勢止むを得ざるための消極的開國論であつた。蓋し「新論」の結末に於ても「天地は活物にして、人も亦活物なり、活物を以て活物の間に行ふ。其の變は勝けて窮むべからず。事は時を逐うて轉じ機は瞬息にあり」といひ、更に「今日の言ふところは明日未だ必ずしも行ふべからず。故に一たび之を口に發すれば則ち空言となる。

「たび之を筆にすれば死論となる。」¹⁵⁾と説けるより見れば、時勢に應じて或は鎖國論となり、或は開國論となるを咎むべきではない。要するに攘夷・開國の何れが適當なるかは時の情勢によつて異なるものであり、一藩一階級の立場でなく國家的立場に於て之を考慮すべきことを道破せるものである。

更に藤田東湖は藤田幽谷の二子であつて、幽谷の弟子會澤安と共に幕末水戸學の中堅人物であつた。内憂外患交々臻れる當時に於て、皇道精神によつて思想の統一を計り、富國強兵を以て經濟・外交の危機を立直さんとしたものである。その經濟思想は「上下富有の議」「土着の議」その他の著書に於て之を見ることが出来る。

× × × × ×

以上の外、山崎闇齋・淺見綱齋が支那を以て中國とし日本を夷狄の國とするの非を痛論せることも特筆すべき專柄であり、その他多くの學者によつて、種々なる日本的思想が説かれてゐるが、今一一之を述べない。たゞ經濟思想における日本精神的思想について、その主流をなすものは、以上に於て概略説述し得たつもりである。

四 餘 論

以上論ずる所は江戸時代における日本主義的なる經濟思想であり、所謂日本經濟學の源流をなすものである。明治維新の後西洋經濟學が滔々として移入され翻譯經濟學の時代を現出したが、その間に於ても自ら國家主義的思想が起り來り、更に保護貿易論・殖産興業思想等に於ても、我國特殊の事情を考慮し國家的立場に於て我國の經濟を論ずるに至つたことは注意すべきことであり、他方に於て明治初年以來二十年代に互つて官廳に於て我國の財政經濟に關する各種の編纂刊行物が現はれたことも、我國本來の經濟專家を捉へ、その發展を考究せんとする

15) 水戸學大系、第二卷、187--188頁。

ものであつて、單なる外國經濟學の追隨ではなく、我國独自の經濟への反省を物語るものといふべきである。これこの期間を以て日本經濟學の胎生期となす所以である。更に日清戰爭以後我國の經濟は近代的なる發展を遂げ英米の經濟學のみならず、獨逸の經濟學をも採り入れ、研究者各自の學問的體系の下に之を討究するに至り、我國における近代經濟學の成立を見るに至つたのであるが、それは畢竟西洋經濟學の日本學者による再生産に過ぎなかつた。然るにかゝる状態に嫌らずして我國の自然的・人間的・社會的なる特殊の事情に立脚し國情に即したる獨特の經濟論を試み、或はわが史的發展の本質を究めんとする努力が行はれるに至り、かくて前期に於て既に母胎内にその萌芽を宿してゐた日本經濟學は、此期に入つて力強き生誕をなすに至つたのである。降つて第一次世界大戰以後、殊に最近の國內及國際狀勢の變化に應じて國家主義的なる思想が勃然として興り來り、日本主義的經濟學が一層の進展を遂ぐるに至つた。即ち前期に生誕した日本經濟學は今やその幼年期を脱して、潑刺たる青年期に入り成長の一路を辿りつゝあるものといふことが出来る。要するに江戸時代に源流を發した日本經濟學は、明治維新以後その胎生期、生誕期を経て今や成長期に入れるものと考へられる。